

研究論文

学生による授業評価に対する態度の構造

- 授業評価に対する態度と実際の授業評価との関係 -

牧 野 幸 志

The Attitude Construct of Student Ratings of Teaching.

— The relationship between the attitudes toward student ratings of teaching and actual student ratings —

Koshi MAKINO

【要 約】本研究は、大学生が「学生による授業評価」をどのようにとらえているかを検討した。まず、学生による授業評価に対する態度の構造を検討した。次に、その授業評価に対する態度と実際の授業評価との関連を検討した。被調査者は、大学生144名(男性61名、女性83名、平均年齢18.52歳)であった。

学生の8割は授業評価に賛成していた。因子分析の結果、学生による授業評価に対する態度には、「授業評価への否定的態度」、「授業評価への肯定的態度」、「権利としての授業評価」、「結果の積極的活用」の4つの因子が抽出された。授業評価に対して否定的な側面と肯定的な側面の両方がみられた。授業評価に対する態度と実際の授業評価の間にはほとんど関連がみられなかった。一般的に授業評価に対してどのように考えているかという態度と実際の授業評価は全く関連がないことが明らかとなった。

キーワード：学生による授業評価，授業評価に対する態度，学生の自己評価，成績。

1. 問題

近年、ほぼすべての大学でFaculty Development活動(教授団の能力開発, 以下FDと表記)が推進されている。このFDの中でも早くから着手され、最も広く行われているのが「大学における教育評価」である。従来、大学においては教員の研究活動の評価が優先されてきたが、現在では教員の教育活動についても評価が行われている。その中でも最も普及しているものが「学生による授業評価」である。文部科学省(2004)によると、平成14年度に学生による授業評価を実施している大学は574校に上り、全大学の約84%を占めている。学生による授業評価は、学期末に学生が受講した授業を評価する形で行われている。この授業評価は、単に教員の教育活動の評価としてだけでなく、授業改善の資料としても活用されている。

1.1. 学生による授業評価に関する研究の動向

大学における「学生による授業評価」は既に広く普及しており、主に教育心理学や教育評価の分野で多くの研究が発表されている(例えば、井上, 1993; 牧野, 2001a, 2002a, 2002b, 2003a, 2003b, 2004; 松田・三宅・谷村・小嶋, 1999; 南・松尾, 2000; 三宅, 1999; 西浦・牧野, 2002; 大槻, 1993; 大山, 2001; 住田, 1996; 安岡・峯崎・山本・高野・香取・光澤, 1997; 安岡・峯崎・山本・高野・光澤・香取, 1995; 安岡・高野・成嶋・光澤, 1986a, 1986b; 安岡・吉川・高野・峯崎・成嶋・光澤・道下・香取, 1989a, 1989b)。学生による授業評価に関する研究は、大きく3つに分類される。まず、学生による授業評価の信頼性と妥当性に関する研究である。学生による授業評価に対して、教員から根強く反対の意見がある。その最大の理由は、評価の信頼性である。受講している学生が正確に授業を評価できるのかを疑問視する声もある。授業評価の信頼性については、さまざまな観点から検討されてきた(金, 1998; 益田, 1996; 南, 2003; 安岡・及川・吉川・山本・高野・光澤・香取, 1994a, 1994b)。安岡他(1994a)によると、約60%の教員が学生による授業評価を全面的に、あるいはほぼ信頼できると回答している一方で、94%の教員が授業評価に対して何らかの不信感を抱いている。安岡他(1994b)は、現在の授業評価には不備やデメリットがあるが、全体としては信頼できる部分が多いという見解を示している。他方、金(1998)では、授業に出席していなければ得られない情報に対する評価を求めたところ、出席していないにも関わらず情報を正確に評価したり、授業で使用していない視聴覚機器に対する評価を行なった学生がいた。このことから金(1988)は授業評価の信頼性に疑問を抱いている。

次に、学生による授業評価の規定因に関する研究が行なわれている(牧野, 2001c, 2002d, 2003a, 2005a; 西浦・牧野, 2002)。これらの研究は、授業の総合的な評価を決定する授業内の要因を探求することを目的としている。どのような要因が授業の総合評価を左右するかが明らかになれば、より効果的な授業を学生に提供することができるからである。牧野(2001c)は、多変量解析を用いて授業評価に影響を与える要因の特定を行なった。その結果、授業評価因子の中で、授業内容評価と教員評価が授業の総合評価に正の影響を与えていた。つまり、授業内容と教員を高く評価するほど、総合評価が高かった。また、牧野(2002d)は、授業内容評価、教員評価に加えて、成績の判定基準の評価が授業の総合評価に与えるかを検討した。その結果、成績の判定基準の評価は総合評価には影響を与えていなかった。

学生による授業評価に対する態度の構造

最後に、学生による授業評価に影響を与える外的要因の検討である。学生による授業評価は授業内容とは直接関係のない他の要因によって大きく影響を受けることが報告されている。授業を取り巻く環境によっても評価が変わってくる。例えば、開講曜日や開講時限により評価が変動する(安岡他, 1989a)。また、教員の年齢が下がるほど評価が高く(安岡他, 1997; 安岡他, 1995)、職階が下がるほど評価が高い(安岡他, 1995; 安岡他, 1989a)ことが明らかとなっている。さらに、評価の実施時期により異なることも報告されている(牧野・西浦, 2004; 益田, 1996)。また、評価を行う学生側の要因にも授業評価は影響を受ける。例えば、牧野(2001a, 2001b)では、自己評価(講義中の積極的な学習態度)が高い学生は授業を高く評価していた。つまり、よく勉強したと自己認知している学生ほど授業を高く評価する傾向がみられた。牧野(2005b)は、学生の自主的な出席率と授業評価との関係を調べた。その結果、授業にほとんど出席していない学生は他の学生に比べ授業を低く評価し、満足度も低かった。

1.2. 学生による授業評価に対する態度

現在、学生による授業評価の実践研究が報告されている(例えば、平野, 2005; 太田, 2006)。多くの場合、各大学のFD委員会などが評価項目を作成し、授業の終わる学期末に授業時間を利用して実施されている。たいてい、アンケート用紙の配布、回収は各教員が行なう。分析はFD委員会が行ない、その結果を教員本人にフィードバックしたり、学内あるいは学外に公開したりしている。研究報告書は、実施された授業評価の結果をまとめたものであり、平均値や授業評価と他の要因との相関関係が示されていることが多い。

しかし、そもそも評価者である大学生は自分たちが行なう授業評価をどのように考えているのであろうか。従来、授業評価に対する態度は、「反対である」から「賛成である」の1次元(1項目)で扱われることが多かった。これは、非常に単純でわかりやすい形の態度尺度であったが、この態度測定でさえ、評価者である大学生に対しては行なわれておらず、たいていの場合、教員に対して、「学生が大学の授業を評価することについて賛成ですか? 反対ですか?」という形で聞かれることが多かった。この項目は授業評価に賛成か否かだけを問題としている。賛成する態度の中にもより詳しい分類があるだろうし、反対する態度にもその理由があるのではないだろうか。授業評価に対する態度を「賛成と反対」という対局した単純な1次元と考えることには問題があるように思われる。学生による授業評価に対する態度は、いくつもの次元があるもっと複雑なものであろう。

1.3. 本研究の問題と目的

これまで、学生が授業評価に対してどのような態度をもっているかが明らかにされてこなかった。本研究では、実際の授業に対しての評価ではなく、授業評価そのものについて、学生がどのような態度をもっているか測定する。しかも、賛成 - 反対の1次元だけでなく、複数の次元で考える。ここでいう学生による授業評価とは、大学機関(短大を含む)において、学生が受けた授業に対して行なう評価である。

本研究の第1の目的は、学生による授業評価に対する態度の構造を明らかにすることである。

授業を評価する立場である大学生が授業評価に対してどのような態度をもっているのかを検討していく。第2の目的は、学生による授業評価に対する態度と実際の授業評価との関連を検討することである。一般的に大学生が授業評価をどのようにとらえているかという態度と実際に行なう授業評価との間に関連がみられるのかを明らかにする。

2. 方法

2.1. 対象授業と被調査者

平成17年度「心理学」(教養選択科目, 全13回, 登録者数189名)の1クラスを対象とし, 試験実施直前に記名式の調査を行なった。被調査者は大阪府内の私立大学の学生144名(男性61名, 女性83名, 平均年齢18.52歳, 年齢幅18~29歳)であった。授業は講義形式で教科書を用いて行なわれた。授業日時は, 毎週木曜日3時限(13:00~14:30)であった。クラスサイズは, 140名程度であった。担当教員は, 男性(教育歴5年)であった。出席は取られていなかった。

2.2. 調査用紙の構成と成績評価

学生による授業評価に対する態度項目 学生が授業評価についてどのように考えているかを知るために平成17年6月に「学生による授業評価についてどう思うか?」という自由回答の調査を行なった。この調査で得られた項目を分類し, 21項目を作成した(項目の詳細については付録参照)。

学生による授業評価への賛否 総合的に判断して学生による授業評価に対して賛成か, 反対かの回答を求めた(1項目)。「1.非常に反対」~「5.非常に賛成」の5件法で回答を求めた。

学生による授業評価 牧野(2001a, 2002b, 2003a), 松田他(1999), 西浦・牧野(2002)を参考に作成された授業評価簡易版(牧野, 2005a)を使用した。この授業評価は, 授業の内容を評価する「内容評価」, 授業を行なう教員を評価する「教員評価」, 授業方法(板書の仕方や資料の使い方など)を評価する「方法評価」から構成されている。

授業の総合評価と満足度 対象授業の総合評価, 満足度(各1項目)に対してそれぞれ, 「非常に悪い」~「非常に良い」, 「非常に不満」~「非常に満足」の5段階で評定を求めた(1~5点)。得点が高いほど評価が高いことを示す。

学生による自己評価 牧野(2004, 2005a)と同様の自己評価項目(受講態度5項目, 学習態度5項目計10項目)を使用した(項目の詳細については付録参照)。学生の自己評価に対する項目に対して, 「まったくあてはまらない」~「非常にあてはまる」の5段階で評定を求めた(1~5点)。得点が高いほど授業における自己評価が高いことを示す。

成績評価 成績は, 学期末の試験期間に行なわれた試験の結果を利用した。試験はマークシート形式と記述式の両方を含む筆記試験であり, 100点満点であった。

2.3. 調査手続き

平成17年7月の通常授業期間中の当該授業の時間内に調査を行なった。調査は, 授業担当者からのアンケートという形で記名式で行なわれた。記名式にした理由は, 後に試験結果を研究

学生による授業評価に対する態度の構造

に使用するためである。調査は、授業終了前の約10分を用いておこなわれた。したがって、授業評価実施時点においては、学生は試験を受けていない。

3. 結果

3.1. 学生による授業評価への賛否度

学生による授業評価に対する賛否度を調査したところ、有効回答140名中、「非常に反対」は3名(2.1%)、「やや反対」は5名(3.6%)、「どちらともいえない」は18名(12.9%)、「やや賛成」は67名(47.9%)、「非常に賛成」は47名(33.6%)であった。80%以上の学生が学生による授業評価に賛成していた。また、この比率は男女で差はほとんどみられなかった。

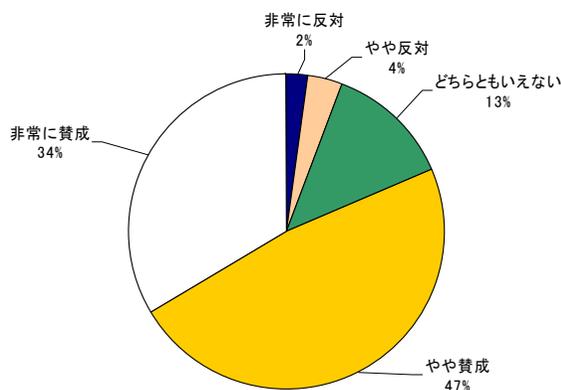


Figure 1. 授業評価に対する賛否度

3.2. 因子分析

学生による授業評価に対する態度項目21項目の評定値に対して因子分析を行なった(Table 1)。固有値1を基準とする因子分析(主因子法,バリマックス回転)を行なった結果,4因子構造ととらえた。第1因子は“授業評価は時間の無駄である。”、“授業評価は必要ない。”、“授業を評価することに興味がない。”など授業評価に対する否定的な態度に関する項目に負荷が高かった。したがって,これらを「授業評価への否定的態度」因子とした。そして,「授業評価への否定的態度」を示す6項目(=. 823)の平均を「授業評価への否定的態度」得点として算出した(1~5点,得点が高いほど,授業評価に対して否定的な態度をもつ)。第2因子は“授業評価は,先生への要望を伝えるための有効な手段である。”、“授業評価は,学生が主張するよい機会である。”など4項目に負荷が高かった。これらは,学生による授業評価の実施を肯定的に評価していると捉えられたので「授業評価への肯定的態度」因子と命名した。これら4項目(=. 827)の平均を「授業評価への肯定的態度」得点として算出した(1~5点,得点が高いほど,授業評価に対して肯定的な態度をもつ)。第3因子は“先生は授業評価の結果を参考にしてほしい。”、“授業評価は授業の不満を述べるためにも必要である。”、“授業評価は学生の権利である。”など学生の権利として授業評価に賛成している態度に関する項目に負荷が高かった

め、「権利としての授業評価」因子とした。これら「権利としての授業評価」に関する4項目(= .687)の平均値を「権利としての授業評価」得点として算出した(1~5点, 得点が高いほど, 権利として授業評価を肯定する態度をもつ)。第4因子は“授業評価の結果が知りたい。”, “授業評価の結果を見た後, 先生がどのように行動するかを知りたい。”など授業評価の結果の活用に関する項目に負荷が高かった。したがって, これらを「結果の積極的活用」因子とした。そして, 「結果の積極的活用」を示す3項目(= .560)の平均を「結果の積極的活用」得点として算出した(1~5点, 得点が高いほど, 授業評価の結果の積極的活用について肯定的な態度をもつ)。

Table 1 授業評価に対する態度項目の因子分析の結果(バリマックス回転後)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
授業評価への否定的態度					
5. 授業評価は時間の無駄である。	.765	-.144	.158	.009	.639
15. 授業評価は必要ない。	.713	-.156	-.131	.026	.718
9. 授業を評価することに興味がない。	.590	.037	-.209	.045	.496
17. 授業評価は意味がないと思う。	.582	-.367	.056	.120	.625
1. 授業評価はめんどくさい。	.554	.079	.021	-.121	.414
21. 授業評価の回数(現在半年に1回)はもっと少なくてよい。	.466	-.039	.054	-.210	.382
授業評価への肯定的態度					
3. 授業評価は, 先生への要望を伝えるための有効な手段である。	-.046	.768	.009	-.097	.551
6. 授業評価は, 学生が主張するよい機会である。	-.027	.717	.099	-.143	.556
7. 授業評価の結果を今後の授業に生かしてほしい。	.087	.699	.098	.149	.677
2. 学生の意見を聞くために授業評価は必要である。	-.290	.624	-.145	.181	.608
権利としての授業評価					
11. 先生は授業評価の結果を参考にしてほしい。	.104	.238	.739	-.050	.587
14. 授業評価は授業の不満を述べるためにも必要である。	-.030	.119	.594	.044	.409
10. 授業評価は学生の権利である。	-.262	-.073	.474	.043	.409
20. 学生は真剣に授業評価に取り組むべきである。	-.445	-.277	.330	.198	.359
結果の積極的活用					
12. 授業評価の結果が知りたい。	-.185	-.198	-.011	.687	.378
8. 授業評価の結果を見た後, 先生がどのように行動するかを知りたい。	.017	.258	-.017	.641	.501
19. 授業評価の質問項目をより詳しくする方がよい。	-.164	-.177	.063	.376	.248
残余項目					
4. 授業評価の結果がどのように生かされるのかが不明である。	.380	.186	-.059	.347	.341
13. 授業評価は授業の改善の材料になる。	-.326	.193	.257	.033	.452
16. 授業評価の結果, 本当に授業が改善されるか疑問である。	.312	.115	.302	.313	.434
18. 学生が大学の先生の授業を評価すべきではない。	-.008	-.403	-.212	.164	.336

N =144

学生による授業評価に対する態度の構造

3.3. 学生による授業評価に対する態度の因子間の関係

学生による授業評価に対する態度の3因子間の関連性をみるために相関分析を行なった (Table 2)。授業評価の3因子間の相関をみたところ、「授業評価への否定的態度」は、「授業評価への肯定的態度」、「権利としての授業評価」と比較的強い負の相関がみられた(それぞれ、 $r = -.438$, $r = -.461$)。また、「授業評価への肯定的態度」と「学生の権利としての授業評価」との間には比較的強い正の相関がみられた($r = .430$)。さらに、「結果の積極的活用」は、「授業評価への肯定的態度」、「学生の権利としての授業評価」と弱い正の相関がみられた(それぞれ、 $r = .300$, $r = .356$)。「授業評価への否定的態度」以外の因子間には正の相関がみられ、授業評価への賛成の関連がみられる。

3.4. 学生による授業評価と学生の自己評価, 成績評価

対象となった授業の評価をTable 3に示した。学生による授業評価は、内容評価, 教員評価, 方法評価の平均値がそれぞれ4.38, 4.18, 4.41と比較的高かった。授業の総合評価と満足度は、それぞれ4.58, 4.55であり比較的高かった。自己評価は、受講態度, 学習態度がそれぞれ4.46, 4.24と高かった。特に「私語をしなかった」、「居眠りをしなかった」などの受講態度については非常に高かった。試験の平均得点は、47.87点(100点満点)であり、比較的難しい試験問題であった。概して、対象となった授業の評価は高かった。また、受講した学生の自己評価も高かった。

Table 2 授業評価に対する態度の因子間相関と各因子の平均値, 標準偏差

	授業評価に対する態度				平均値	標準偏差
	否定的	肯定的	権利	結果活用		
授業評価に対する態度						
授業評価への否定的態度					2.37	0.74
授業評価への肯定的態度	-.438**				4.18	0.73
権利としての授業評価	-.461**	.430**			4.08	0.60
結果の積極的活用	-.176*	.300**	.356**		3.75	0.78

$N = 144$, * $p < .05$, ** $p < .01$

Table 3 当該授業の評価, 総合評価, 満足度, 学生の自己評価と成績

	授業評価 ^{a)}			総合評価 ^{a)}	満足度 ^{a)}	自己評価 ^{a)}		成績 ^{b)}
	内容	教員	方法			受講	学習	
平均値	4.38	4.18	4.41	4.58	4.55	4.46	4.24	47.87
(標準偏差)	(0.47)	(0.65)	(0.49)	(0.62)	(0.67)	(0.53)	(0.59)	(17.70)

^{a)} 評定値は1~5の値をとりうる (3が「どちらでもない」に相当)。得点が高いほど評価が高いことを示す。

^{b)} 成績は0~100の値をとりうる。

3.5. 授業評価に対する態度と当該授業の評価との関係

授業評価に対する態度(4因子)と実際の授業評価(3要因), 総合評価, 授業への満足度との相関関係を検討した(Table 4)。その結果, 授業の内容評価と「権利としての授業評価」, 「結果の積極的活用」との間に弱い正の相関がみられた(それぞれ, $r = .241$, $r = .292$)。権利として授業評価に賛成の人ほど, 結果を積極的に活用してほしいと思っている人ほど当該授業の内容を高く評価していた。また, 授業の方法評価は「授業評価への否定的態度」と弱い負の相関, 「権利としての授業評価」と弱い正の相関がみられた(それぞれ, $r = -.229$, $r = .272$)。権利として授業評価に賛成の人ほど, 当該授業の授業方法を高く評価していた。授業評価に否定的な考えを持っている人ほど, 当該授業の授業方法を低く評価していた。概して, 授業評価に対する態度と実際の授業評価との間にほとんど関連はみられなかった。

3.6. 授業評価に対する態度と学生の自己評価との関係

授業評価に対する態度(4因子)と当該授業での学生の自己評価(受講態度, 学習態度)との相関関係を検討した(Table 4)。その結果, 学習態度と「権利としての授業評価」との間に弱い正の相関がみられた($r = .219$)。授業に対する学習態度の良い人ほど学生の権利としての授業評価に賛成していた。それ以外は関連がみられなかった。授業評価に対する態度と個々の授業での学生の自己評価にはほとんど関連はみられなかった。

Table 4 授業評価に対する態度と当該授業の評価, 自己評価との関連

	授業評価に対する態度			
	否定的	肯定的	権利	結果活用
当該授業の評価				
内容評価	-.134	.040	.241 **	.292 **
教員評価	-.160	.100	.083 **	.110
方法評価	-.229 **	.090	.272 **	.058
総合評価	-.101	-.036	.119	.115
満足度	-.163	.045	.077	.067
学生の自己評価				
受講態度評価	-.119	-.094	.022	.135
学習態度評価	-.149	-.030	.219 **	.138

$N = 144$, ** $p < .01$

3.7. 授業評価に対する態度と学生の成績

授業評価に対する態度が性別と成績により異なるかを検討した。まず, 試験結果を基に, 学生を成績高得点群, 成績中得点群, 成績低得点群の3群に分類した。分析は, 性別(男性・女性) × 成績(高得点群・中得点群・低得点群)の2要因分散分析(いずれも被験者間要因)で行なった。

学生による授業評価に対する態度の構造

従属変数は、授業評価に対する態度の4つの因子得点であった。

授業評価への否定的態度 授業評価への否定的態度得点に対して、性別と成績の2要因分散分析を行なった(Table 5 参照)。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった(それぞれ、 $F(1, 126)=1.34, n.s.$ 、 $F(2, 126)=2.06, n.s.$ 、 $F(2, 126)=0.47, n.s.$)。授業評価への否定的態度に性差はみられず、学生の成績によっても差はなかった。

授業評価への肯定的態度 授業評価への肯定的態度得点に対して、性別と成績の2要因分散分析を行なった(Table 6参照)。その結果、成績の主効果が有意であった($F(2, 126)=4.70, p < .05$)。多重比較の結果、成績高得点群($M=4.58$)は、成績中得点群($M=3.99$)よりも授業評価への肯定的態度得点が高かった(Figure 2 参照)。

Table 5 性別と成績による授業評価への否定的態度の差異¹⁾

性別	成績	成績低得点群	成績中得点群	成績高得点群
男性		2.41 <i>N</i> = 31, <i>M</i> = 26.48	2.36 <i>N</i> = 20, <i>M</i> = 48.76	1.84 <i>N</i> = 5, <i>M</i> = 67.60
	女性	2.40 <i>N</i> = 14, <i>M</i> = 29.67	2.52 <i>N</i> = 27, <i>M</i> = 52.04	2.23 <i>N</i> = 35, <i>M</i> = 67.36

注1) *M*は、各得点群の平均値を示す。テストは100点満点であり、全体の平均値(標準偏差)は、47.87(17.70)である。

評定値は、1~5点の得点を取りうる。

Table 6 性別と成績による授業評価への肯定的態度の差異¹⁾

性別	成績	成績低得点群	成績中得点群	成績高得点群
男性		4.30 <i>N</i> = 31, <i>M</i> = 26.48	3.94 <i>N</i> = 20, <i>M</i> = 48.76	4.80 <i>N</i> = 5, <i>M</i> = 67.60
	女性	4.05 <i>N</i> = 14, <i>M</i> = 29.67	4.05 <i>N</i> = 27, <i>M</i> = 52.04	4.35 <i>N</i> = 35, <i>M</i> = 67.36

注1) *M*は、各得点群の平均値を示す。テストは100点満点であり、全体の平均値(標準偏差)は、47.87(17.70)である。

評定値は、1~5点の得点を取りうる。

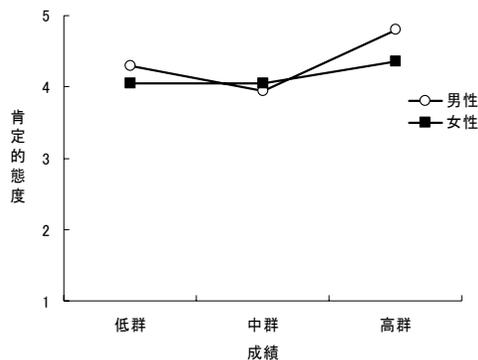


Figure2. 成績と性別による授業評価への肯定的態度の差異

権利としての授業評価 権利としての授業評価得点に対して、性別と成績の 2 要因分散分析を行なった(Table 7 参照)。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった(それぞれ、 $F(1, 126)=2.05, n.s.$ 、 $F(2, 126)=1.16, n.s.$ 、 $F(2, 126)=0.84, n.s.$)。権利としての授業評価に関する態度は、性別、成績によって差はみられなかった。

結果の積極的活用 結果の積極的活用得点に対して、性別と成績の 2 要因分散分析を行なった(Table 8 参照)。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった(それぞれ、 $F(1, 126)=0.90, n.s.$ 、 $F(2, 126)=1.26, n.s.$ 、 $F(2, 126)=2.18, n.s.$)。結果の積極的活用に関する態度に、性差、成績による差はみられなかった。

Table 7 性別と成績による権利としての授業評価の差異¹⁾

性別	成績	成績低得点群	成績中得点群	成績高得点群
	男性		4.04 $N = 31, M = 26.48$	4.19 $N = 20, M = 48.76$
女性		4.05 $N = 14, M = 29.67$	3.87 $N = 27, M = 52.04$	4.15 $N = 35, M = 67.36$

注 1) M は、各得点群の平均値を示す。テストは 100 点満点であり、全体の平均値(標準偏差)は、47.87 (17.70)である。

評定値は、1~5 点の得点を取りうる。

Table 8 性別と成績による結果の効果的活用の差異¹⁾

性別	成績	成績低得点群	成績中得点群	成績高得点群
	男性		3.53 $N = 31, M = 26.48$	4.05 $N = 20, M = 48.76$
女性		3.79 $N = 14, M = 29.67$	3.64 $N = 27, M = 52.04$	3.82 $N = 35, M = 67.36$

注 1) M は、各得点群の平均値を示す。テストは 100 点満点であり、全体の平均値(標準偏差)は、47.87 (17.70)である。

評定値は、1~5 点の得点を取りうる。

4. 考察

本研究の第 1 の目的は、学生による授業評価に対する態度の構造を明らかにすることであった。評価者である大学生が授業評価に対してどのような態度をもっているのかを検討した。第 2 の目的は、学生による授業評価に対する態度と実際の授業評価との関連を調べることであった。一般的な授業評価に対する態度と実際の授業評価との関連を検討した。

4.1. 学生による授業評価への賛否度

学生による授業評価に対する賛否度を調査したところ、全体の 80% 以上の学生が授業評価の実施に賛成していた。これは非常に高い割合であった。逆に、非常に反対、やや反対という学生は 5% 強にすぎなかった。学生のほとんどが 1 年生であり、さらに対象授業が前期であった

学生による授業評価に対する態度の構造

ことから、大学に入学してまもない学生においても大学での授業を学生が評価することに賛同していることがうかがえる。これは、これまで評価される教員側から根強い反対があったことは対照的である。

4.2. 学生による授業評価に対する態度の構造

因子分析の結果をもとに、学生による授業評価に対する態度の態度構造を分析した。学生による授業評価に対する態度の21項目から、評定値にもとづいて、最終的に4因子が抽出された。各因子は、「授業評価への否定的態度」、「授業評価への肯定的態度」、「権利としての授業評価」、「結果の積極的活用」と命名された。「授業評価への否定的態度」因子は、授業評価への反対への態度を示すもので、その理由は、「興味がない、意味がない」などの無関心、無意味と考えているものと「めんどくさい」という自己のコストがあげられた。残りの3因子は、いずれも授業評価への肯定的な態度を示すものであった。「授業評価への肯定的態度」は、積極的に授業評価を推進する態度を示しており、授業評価によって学生の主張を教員に伝えるべきである、その手段として有効であるという考えを反映していた。「権利としての授業評価」は、授業評価に対して肯定的ではあるが、積極的に推進するというわけではなく、授業を受けている者としての権利として授業評価は行なわれるべきであるという消極的な態度であった。さらに、「結果の積極的活用」は、授業評価の結果が知りたい、授業評価の結果、どのような改善が行なわれるのかということへの関心を示した態度であった。3つの因子の間には、正の相関がみられた。したがって、授業評価に賛成であるという学生が多かったが、その学生の態度の中には、授業評価を行なうべきであるという積極的な態度、授業を受けている学生として評価はすべきであるという消極的な態度、そして、その授業評価の結果を効果的に活用するべきだという態度がみられることが明らかとなった。

4.3. 当該授業の評価と学生の自己評価、成績評価

本研究で対象となった授業での学生による授業評価は、内容評価、教員評価、方法評価の平均値がそれぞれ4.38、4.18、4.41と比較的高かった。総合評価と満足度も、それぞれ4.58、4.55であり比較的高かった。このことから全体として対象授業の評価は高く、受講生が授業に満足していたことがわかる。また、自己評価は、受講態度、学習態度がそれぞれ4.46、4.24と高かった。これは、対象となった授業では、初回のオリエンテーションにて授業の方法、ルールなどについて厳しく説明があった結果であると思われる。また、授業では出席が取られていなかったため、出席している学生は学習意欲の高い学生だったため学習態度もよかったと考えられる。成績の平均点は、100点満点において47.87点と低かった。これは、試験が複数回答方式のマークシートであり、さらに時間が40分間であったため多少時間が足りなかったことによるものかもしれない。

4.4. 授業評価に対する態度と学生による授業評価、学生の自己評価との関係

授業評価に対する態度と実際の授業評価、総合評価、授業への満足度との関連を検討した。

その結果、授業評価に対する態度と実際の授業評価との間にはほとんど関連がみられなかった。授業の内容評価と「権利としての授業評価」、「結果の積極的活用」との間に弱い正の相関がみられた。権利として授業評価に賛成の人ほど、結果を積極的に活用してほしいと思っている人ほど当該授業の内容を高く評価していた。また、授業の方法評価は「授業評価への否定的態度」と弱い負の相関、「権利としての授業評価」と弱い正の相関がみられた。権利として授業評価に賛成の人ほど、当該授業の授業方法を高く評価していた。授業評価に否定的な考えを持っている人ほど、当該授業の授業方法を低く評価していた。

次に、授業評価に対する態度と当該授業での学生の自己評価(受講態度、学習態度)との関連を検討した。その結果、授業評価に対する態度と個々の授業での学生の自己評価にはほとんど関連はみられなかった。学習態度と「権利としての授業評価」との間に弱い正の相関がみられた。授業に対する学習態度の良い人ほど学生の権利としての授業評価に賛成していた。学習態度の良いまじめな学生が権利として授業評価を主張するということであろう。

4.5. 授業評価に対する態度と学生の成績との関係

授業評価に対する態度が性別と成績により異なるかを検討した。学生の性別と成績により、「授業評価への否定的態度」、「授業評価への肯定的態度」、「権利としての授業評価」、「結果の積極的活用」の4つの授業評価に対する態度が異なるかを調べた。その結果、「授業評価への肯定的態度」以外では、性別、成績いずれによる差もみられなかった。つまり、男性でも女性でも同じような態度をもっており、成績の良し悪しによっても態度は変わらなかった。

「授業評価への肯定的態度」については、学生の成績により差がみられた。成績が高得点の学生は、成績が中程度の得点の学生よりも授業評価への肯定的態度得点が高かった。つまり、授業評価に対してより肯定的な態度をもっていた。しかし、成績が低得点の学生との間に差はみられなかった。これは、成績が非常に良い学生は、まじめな学生であり、このまじめさが授業評価についても積極的に取り組むべきだという態度につながっていると考えられる。成績のあまり良くなかった学生は、多少まじめさが足りない部分があり、授業評価についてもあまり積極的ではないのであろう。成績の悪かった学生との間で差がみられなかったのは、成績低得点群の学生はおそらく授業にもほとんど出席していない学生であり、自分の行動の後ろめたさを隠すために授業評価に肯定的な態度を示したものと推測される。しかし、これは推測の域を出ないため、今後より詳しい分析が必要であろう。

4.6. 今後の課題

今後の課題として、次の2つの課題が挙げられる。1つは、授業評価に対する態度に影響を与える個人特性を検討することである。本研究において、授業評価に対する態度と実際の授業評価の間にはほとんど関連がないことが明らかとなった。一般的に、大学生は授業評価に対して賛成の態度をもっており、その結果の活用にも興味を持っている。しかし、その態度が個々の授業の評価には影響を与えていないようである。今後は、どのような個人の性格特性が学生の授業評価に対する態度に影響を与えるのかを調べる必要があるだろう。2つめは、学年間や

学生による授業評価に対する態度の構造

大学と短大の間による授業評価に対する態度の差を調べる必要があるだろう。本研究では、調査対象者のほとんどは高校を卒業したばかりの1年生であった。大学入学後、学年が進むにつれて学生の授業への態度は変化していく。したがって、2年生、3年生などにおいては、今回の結果とは異なる態度をもっている可能性がある。また、短大の学生は、授業選択の自由度が低く、大学生に比べて授業評価を高く評定する傾向がみられる(牧野, 2001a, 2001b)。制度の違いから授業評価に対しても4年制の大学生とは異なる態度をもっているかもしれない。

引用文献

- 平野順子 2005 長岡大学生による授業評価に関する分析 長岡大学紀要, **3**, 33-44.
- 井上正明 1993 学生による授業評価の方法論的考察 大学の授業評価に関する実証的研究(8) 福岡教育大学紀要, **42**, 277-291.
- 金 明哲 1998 「学生による授業評価」の信頼性について 社会情報, **7(2)**, 201-205.
- 牧野幸志 2001a 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 教養選択科目「社会心理学」の場合 高松大学紀要, **35**, 1-16.
- 牧野幸志 2001b 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 専門必修科目「人間関係論」の場合 高松大学紀要, **35**, 17-31.
- 牧野幸志 2001c 学生による授業評価の規定因の検討(1) 多変量解析を用いた因果モデルの検討 高松大学紀要, **36**, 55-66.
- 牧野幸志 2002a 学生による授業評価と自己評価との関連 ゲストスピーカーによる1回限りの講義を対象として 高松大学紀要, **37**, 83-92.
- 牧野幸志 2002b 学生による授業評価, 満足感と成績との関係 成績の悪い学生は本当に授業を酷評するのか? 高松大学紀要, **38**, 35-47.
- 牧野幸志 2002d 学生による授業評価の規定因の検討(2) 成績の判定基準が授業評価に与える影響 高松大学紀要, **38**, 63-71.
- 牧野幸志 2003a 学生による授業評価の規定因の検討(3) 記名式による調査が授業評価に与える影響 高松大学紀要, **40**, 63-75.
- 牧野幸志 2003b 評価懸念が学生による授業評価に与える影響(1) 授業担当者への評価懸念のない場合 高松大学紀要, **40**, 77-87.
- 牧野幸志 2004 評価懸念が学生による授業評価に与える影響(2) 授業担当者への評価懸念のある場合 高松大学紀要, **41**, 75-85.
- 牧野幸志 2005a 学生による授業評価の規定因の検討(4) 授業概要の認知度が授業評価に与える影響 経営情報研究, **12(2)**, 1-20.
- 牧野幸志 2005b 学生による授業評価と出席率との関係(1) 授業に出ていない学生は授業を悪く評価するのか? 経営情報研究, **13(1)**, 1-14.
- 牧野幸志・西浦和樹 2004 学生による授業評価と成績との関係 学生の成績と評価時期により授業評価は変わるのか? 日本心理学会第68回発表論文集, 1163.
- 益田良子 1996 学生による授業評価の試み 実施時期による検討 日本心理学会第60回大会発表論文集, 408.
- 松田文子・三宅幹子・谷村 亮・小嶋佳子 1999 学生による授業評価と自己評価, 授業選択態度, 及び成績の関係 教職必修科目「生徒指導論」の場合 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), **48**, 121-130.
- 南 学 2003 学生による授業評価と信頼性と妥当性に関する検討 松山大学論集, **14(6)**, 55-67.
- 南 学・松尾浩一郎 2000 単位の認定・不認定が授業評価に与える影響 日本教育心理学会

学生による授業評価に対する態度の構造

第42回総会発表論文集, 384.

- 三宅幹子 1999 大学生における授業選択態度のタイプと授業評価, 自己評価, 及び成績の関係 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), **48**, 141-148.
- 文部科学省 2004 大学における教育内容等の改革状況について 2004年3月23日報道発表
- 西浦和樹・牧野幸志 2002 教師の実践的力量向上のための授業改善の試み 学生による授業評価の要因分析 日本教育工学会誌, **26**, 197-200.
- 太田伸幸 2006 授業評価を用いた授業改善の試み(3) 講義型授業におけるWebCTの導入 愛知工業大学研究報告, **41**, 41-51.
- 大槻 博 1993 多摩大学の学生による授業評価「ボイス」をめぐる考察 一般教育学会誌, **15**, 47-49.
- 大山泰宏 2001 大学教育評価の課題と展望 京都大学高等教育研究, **7**, 37-55.
- 住田幸次郎 1996 学生による「授業評価」に関する数量的分析 ノートルダム女子大学研究紀要, **26**, 23-40.
- 安岡高志・峯崎俊哉・山本銀次・高野二郎・香取草之助・光澤舜明 1997 学生の授業評価におよぼす教員の年齢の影響 大学教育学会誌, **19**, 75-79.
- 安岡高志・峯崎俊哉・山本銀次・高野二郎・光澤舜明・香取草之助 1995 東海大学における1993年度前期授業評価の実施結果 授業評価の性質 一般教育学会誌, **17**, 104-109.
- 安岡高志・及川義道・吉川政夫・山本銀次・高野二郎・光澤舜明・香取草之助 1994a 学生による授業評価の信頼性に対する教員意識の調査 東海大学紀要 教育研究所, **2**, 87-98.
- 安岡高志・及川義道・吉川政夫・山本銀次・高野二郎・光澤舜明・香取草之助 1994b 東海大学の自己評価の基本方針および学生による授業評価の信頼性に関するアンケート調査 一般教育学会誌, **16(1)**, 51-61.
- 安岡高志・高野二郎・成嶋 弘・光澤舜明 1986a 学生による講義評価 一般教育学会誌, **8(1)**, 46-59.
- 安岡高志・高野二郎・成嶋 弘・光澤舜明 1986b 学生による講義評価 一般教育学会誌, **8(2)**, 50-60.
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989a 学生による講義評価 学生の質と講義評価の関係について 一般教育学会誌, **11**, 56-59.
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989b 学生による講義評価 成績と講義評価の関係 一般教育学会誌, **11**, 99-102.

付録 実際に使用した調査用紙

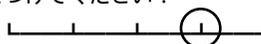
学生による授業評価に対するアンケート

このアンケートは、学生が授業を評価するという、いわゆる「学生による授業評価」に関するものです。授業評価に関する以下の質問にご回答ください。この調査の結果はすべて統計的に処理され、学籍番号と名前は協力点をつけるために使用します。個人の回答の結果が公開されることは絶対にありませんので、正直にお答えください。このアンケートへの回答は本授業の成績には一切関係しません。ご協力お願いいたします。

調査実施日 ()年 ()月()日 ()曜日 ()時限目
 学籍番号 () 名前 () 年齢 ()歳 性別(男・女)

(回答例) 以下の例を参考に、最もあてはまるところに「 」をつけてください。

例 私は、決断が早い方である



I. 「学生による授業評価」についてお尋ねします。以下の各質問項目に対してあなたの考えに最もよくあてはまるもの1つに○をつけてください。

非常にそう思う
 ややそう思う
 どちらでもない
 あまりそう
 思わない
 思う
 思わない
 そう

1. 授業評価はめんどくさい。
2. 学生の意見を聞くために授業評価は必要である。
3. 授業評価は、先生への要望を伝えるための有効な手段である。
4. 授業評価の結果がどのように生かされるのかが不明である。
5. 授業評価は時間の無駄である。
6. 授業評価は、学生が主張するよい機会である。
7. 授業評価の結果を今後の授業に活かしてほしい。
8. 授業評価の結果を見た後、先生がどのように行動するかを知りたい。
9. 授業を評価することに興味がない。
10. 授業評価は学生の権利である。
11. 先生は授業評価の結果を参考にしてほしい。
12. 授業評価の結果が知りたい。
13. 授業評価は授業の改善の材料になる。
14. 授業評価は授業の不満を述べるためにも必要である。
15. 授業評価は必要ない。
16. 授業評価の結果、本当に授業が改善されるか疑問である。
17. 授業評価は意味がないと思う。
18. 学生が大学の先生の授業を評価すべきではない。
19. 授業評価の質問項目をより詳しくする方が良い。
20. 学生は真剣に授業評価に取り組むべきである。
21. 授業評価の回数(現在半年に1回)はもっと少なくてよい。
22. 総合的に判断して、あなたは授業評価に賛成ですか？反対ですか？1つ選んでください
 (1. 非常に反対, 2. やや反対, 3. どちらともいえない, 4. やや賛成, 5. 非常に賛成)

裏に続きます

学生による授業評価に対する態度の構造

付録 実際に使用した調査用紙

II. この授業についてお尋ねします。以下の各質問項目に対してあなたの考えに最もよくあてはまるもの1つに○をつけてください。

	まったく 思わない そう	あまり 思わない そう	どちら でもない	やや 思う そう	非常に 思う そう
授業内容について					
1. 授業内容は、わかりやすかった	_____	_____	_____	_____	_____
2. 授業内容は、興味を持てるものだった	_____	_____	_____	_____	_____
3. 授業内容は、将来、役立つものであった	_____	_____	_____	_____	_____
4. 授業内容は、新鮮なものであった	_____	_____	_____	_____	_____
5. 授業内容は、専門性が高かった	_____	_____	_____	_____	_____
担当教員(教官)について					
6. 教育に対する熱意が感じられた	_____	_____	_____	_____	_____
7. 担当教員(教官)に親しみがもてた	_____	_____	_____	_____	_____
8. 担当教員(教官)は信頼できた	_____	_____	_____	_____	_____
9. 学生の意見や質問に十分に答えていた	_____	_____	_____	_____	_____
10. 私語を注意するなど、教室は静かに保たれていた	_____	_____	_____	_____	_____
授業形態、授業方法について					
11. テキストや配布資料は、わかりやすかった	_____	_____	_____	_____	_____
12. 黒板(あるいはホワイトボード)や視聴覚教材(OHP, スライド, ビデオなど)が効果的に使われていた	_____	_____	_____	_____	_____
13. 授業の開始が遅れること、授業が早く終ることが多かった	_____	_____	_____	_____	_____

以上の内容を考慮し、この授業の総合評価とこの授業への満足度を判定してください。

	非常に 悪い	やや 悪い	どちら でもない	やや 良い	非常に 良い
14. この授業の総合的な評価は?	_____	_____	_____	_____	_____
15. この授業にどの程度満足していますか?	_____	_____	_____	_____	_____

II. この授業に対するあなた自身の態度についてお聞きます。以下の各質問項目に対して正直にお答えください。あなた自身の態度に最もよくあてはまるもの1つに○をつけてください。

	あまり はまら ない	あまり はまら ない	どちら でもない	やや あては まる	非常に あては まる
1. 授業には、まじめに出席した	_____	_____	_____	_____	_____
2. 授業に遅刻をしなかった	_____	_____	_____	_____	_____
3. 授業中、私語をしなかった	_____	_____	_____	_____	_____
4. 授業中、居眠りをしなかった	_____	_____	_____	_____	_____
5. 積極的にノートをとった	_____	_____	_____	_____	_____
6. 授業内容とこれまでの体験を結びつけて理解した	_____	_____	_____	_____	_____
7. 授業に意欲的に取り組んだ	_____	_____	_____	_____	_____
8. 授業中は集中していた	_____	_____	_____	_____	_____
9. 授業内容をよく理解した	_____	_____	_____	_____	_____
10. 試験前にはしっかりと勉強をする(した)	_____	_____	_____	_____	_____

ご協力ありがとうございました。終了の方は、しばらくお待ちください。